

1 コンテナ苗

(1) 導入の背景

森林の多面的機能を発揮させつつ、資源の循環利用による林業の成長産業化を実現するためには、主伐後の適切な再造林の実施が必要です。このため、造林の低コスト化及び苗木の安定供給が一層重要になっています。

国では、造林作業に要するコストの低減のため、人工林等の伐採から造林まで一貫作業システム*の導入（一貫施業*）や、コンテナ苗*の活用等を推進しています。その際、花粉を飛散させるスギ人工林等を伐採するとともに、花粉症対策に資する苗木による植替えを促進する等、花粉症発生源対策にも取り組んでおり、第二世代精英樹*（エリートツリー*）のうち、成長や雄花着花性等に関する基準を満たすものを特定母樹*として指定しています。（林野庁編 2020）。

本県でも、第3次晴れの国おかやま生き生きプランにおいて、令和6年度までに少花粉スギ・ヒノキ苗木による植替えの割合を100%とする目標を掲げており、再造林の確実な実施に向け、一貫施業による施業効率化を推進するとともに、花粉症対策として、特定母樹よりさらに、雄花着生量が少ない、少花粉*スギ・ヒノキ（図-1）コンテナ苗の生産増大や、同苗による植替えの促進を図っています（岡山県 2017、岡山県農林水産部林政課 2020）。



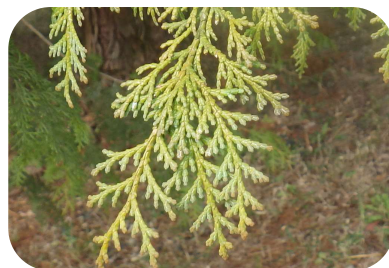
精英樹スギ



少花粉スギ



精英樹ヒノキ



少花粉ヒノキ

図-1 従来の精英樹品種と少花粉品種雄花着生量の比較

（２）コンテナ苗とは

容器内面にリブ*（縦筋状の突起）を設け、容器の底面を開けるなどによって、根巻き防止できる容器（林野庁が開発したマルチキャビティコンテナや、宮崎県林業技術センターが開発したMスターコンテナ*等）で育成された苗を総称し、「コンテナ苗」と呼んでいます。

（３）コンテナ苗の利点

従来の普通苗*と比べ、①通常の植栽適期（春や秋）以外でも、高い活着率が期待できる ②植栽が容易である（植穴が小さくて済む） ③植栽当年から成長を期待できる ④育苗段階で苗畑等の広い圃場を必要としない等 の利点が挙げられます。

２ マルチキャビティコンテナの種類

日本製のものとして、内面リブ方式、サイドスリット方式等があります。

（１）内面リブ方式

キャビティ容量が150ml（JFA150）で40キャビティ*のもの（図-2-1）と、300ml（JFA300）で24キャビティの2種類（以下 トレイ*）があります。150ml容量と300ml容量で育成した苗を比較すると、①現場で植栽した際でも、その後の生育に大きな差はないこと（西山 2019）、②150ml容量の方が育成した苗が軽量であること等から、現在、150ml容量が主流となっています。

キャビティ内側には縦筋状に、根巻き防止用の突起（リブ）が8～12本あります。また底面は、空中根切りを想定し、大きく開いています。



図-2-1 内面リブ方式（縦30cm×横40cm 150mlキャビティ40個連結）

（２）サイドスリット方式

サイドスリット方式（図-2-2）では、コンテナキャビティの側面に、縦筋状へ8本、上下2段のスリット*が設けられており、水平根*の発達を促す（落合 2016）とともに、根巻き防止の役目も果たしています。また、底面は、内部リブ方式と同様、空中根切りを想定し、大きく開いています。